パラグラフの概念形成について

Formation of the Concept of Paragraph

付岡　京子*
Kyoko Tsukeoka

Ⅰ．序――パラグラフの概念

学年の始めに，説明なしにいきなり学生に自由作文の形で英文を書かせると，大部分の学生は文章単位で行を改めて書く．これ迄学習の場で英文を書くという時には，殆どが和文英訳という形の文単位での作業だった為と思われるが，読解の場合にもパラグラフ（paragraph）単位ではなく，文単位で意味を考えている可能性が強いのではないだろうか．英語のパラグラフは日本語の段落とは必ずしも一致しない概念なので，パラグラフという英文の基本的な概念を把握する事は，書く場合は無論の事，読解の場合にも，英文を正しく理解する上で必須であるのみならず，読解力を養う為にも非常に有効であると思われる．どういう予習の仕方をしているかを問うと，まれには，「たとえわからない単語に遭遇しても，パラグラフを通して読んでパラグラフ全体のいわんとする所を汲み取った上で，もう一度わからなかった単語にもどって，文脈・前後関係から推測し，再考した上で辞書にあたる．」と答える者もいないわけではないが，実際には殆どの学生がパラグラフを意識する事なく，わからない単語が出てくる度ごとに辞書をひくという，究極的にみれば極めて能率の悪い予習の仕方をしている様である．つまるところ，英文でまとまったものを書く様になる迄は，パラグラフを意識しないできてしまっている学生が多いというのが実情ではないだろうか．

英文の場合，パラグラフという概念は明確に定義づけられている．Dodge の表現を借りれば，パラグラフは１つの思考単位（a unit of thought）である[(1)]．いいかえれば，１つの中心となる，そのパラグラフを支配する考え（central idea 又は controlling idea[(2)]）を展開させたものがパラグラフである．この場合中心となる考えは１つのみで，２つ以上ある場合は，それぞれ別のパラグラフをたてる．この中心となる考え又は主張が，通常 topic sentence[(3)] で示される．パラグラフは広い意味での全体の主題の一部分をなすものではあるが，それぞれのパラグラフの中心となる考えは，そのパラグラフ内で充分に展開させ，完結させる事が原則である．つまりパラグラフは，一応１つの完結した単位であるという事になる．それ故，意味を把握するに際して，パラグラフを通して読む事に意義がある事がわかる．

パラグラフの長さは，そのパラグラフの主題によっても異なるし，又どういう目的をもって

*英語専攻

書かれているか，どういう読者を想定しているかによっても違ってくる．たとえば，新聞等ではたった1つの文からなるパラグラフも珍しくない．しかしこれは例外的な場合であって，パラグラフの構成は通常 topic sentence による主題の提示に続き，それを裏付けるいくつかの文(support sentences[4])，そして最後に結語といった形をとる．即ち提示された主題に関しては，それを充分に展開させて完結させるわけであるから，ある程度の長さが必要となってくる．

topic sentence はそのパラグラフの鍵ともいえるわけで，書き手がそのパラグラフで何を述べたいのかについての指針となるものでなくてはならない．それ故，内容が余りに広く漠然としたものは，topic sentence としてふさわしくない．ある程度限定されたものの方が，topic sentence としてはよりふさわしいという事になる．最初に指針が与えられるという事は，読む側にとっても，何が書かれているかを理解する上で非常に役に立つわけで，パラグラフの最初に topic sentence をもってくる事が多いのは，この事からもうなずける．しかし topic sentence は，必ずしもパラグラフの最初にもってこなければならないわけではなく，往々にして最後にくる場合があるし，途中にさしはさまれる場合もある．又暗黙の内にいわんとする所が明白な場合には，topic sentence をたてない事すらある．しかし，たとえ形の上で topic sentence という明白な形をとらなくとも，書き手の心の中で，そのパラグラフで述べたいと思っている事が明確になっていなくてはならない事はいう迄もない．

この topic sentence を軸にパラグラフを展開させていくわけであるが，topic sentence に関係のないものはパラグラフに取り入れてはならない．topic sentence に関係のないものは逐次除去して，関係のあるもののみに固執する事を通して，思考の統一性が得られるわけで，これがよいパラグラフの第一条件となる．次にこうして取捨選択された必要不可欠な素材のみを順序よく述べていく事によって，パラグラフに一貫性が得られるわけであるが，物語に於ける年代順，情景描写に於ける左右，遠近等は，それぞれ時間的順序，空間的順序という事ができよう．文と文とが矛盾する事なく，論理的につながっていなければならない事はいう迄もないが，この論理性を基にした順序として，理由づけ，関連性の度合，因果関係，一般論から具体例へ，又はその逆等があげられる．Wilkerson 等はこれ等「論理的順序」に対し，前述の時間的，空間的順序を「自然の順序」として，大きく2つに分類している[5]．当然の事ながら，この記述の順序は，後に述べるパラグラフの展開方法と密接な関係をもっている．

ところで，文と文とのつながりは，適切なつなぎの言葉や代名詞の使用といった機械的な工夫によってもある程度可能であるが，内容そのものに論理的なつながりがないと，どんなに多くのつなぎの言葉を使おうとも，真の一貫性は得られない．つなぎの言葉はあく迄論理的なつながりをより強固に容易にする為の補助的手段にすぎない．しかしながら，適切なつなぎの言葉を有効に使う事は，読み手の理解を助ける上で，表現上非常に大切な事である事は否めない事実である．この観点からすると，文構成上通常は余り注意を払わない副詞，接続詞といった所謂つなぎの言葉の的確な選択が，少なくとも論理的なつながりの上では重要な意味をもっている事がわかる．つまり英文の場合，語の選択という事一つとっても，感覚的にではなく，論理的に関係を深く考えた上でなされなければならないわけである．こういった事は文単位の課題ではなかなか習得しにくい事柄で，パラグラフ単位の学習で初めて習熟できる様になるのではないかと考える．

パラグラフの主題は，そのパラグラフ内で充分に展開させる事が要求されている事はすでに述べたが，展開方法はそれぞれの主題にあわせて適切なものを選ぶわけで，時には幾つかの方法が組み合わさって使われている事もある．文

の分類として，英語では通常，叙述文，描写文，説明文，議論文の4つがあげられるが，前者2つと後者2つとでは，パラグラフの展開のさせ方にかなりの相違が認められる．前者2つに関しては，使われる展開方法も比較的限られていて，むしろ読者の想像にまかせる部分がある程度残されている方が，余韻が生れ，より効果的なパラグラフとなる事がある．つまり，すでに与えられている叙述，描写から，読者の想像のつく事を，改めて説明し直さない方がいい場合がある．これに反し，後者2つの場合は，読み手の納得がいく迄徹底的に説明，説得する事が必要となる．つまり，論理的な詰めがより明確に要求されるわけである．この為によく使われる展開方法としては，手順又は過程，分類，詳述，事実による裏付け，例示，比較対照，因果関係，理由づけ，定義等があげられる．英文の場合，パラグラフが一般論だけで終始する事はまずなく，その主張の裏付けとなる具体例を必要とする．主観的な意見，主張は，客観的な事実の裏付けによって，初めて議論の対象となり，説得力を持つ事ができる様になってくる．

かようにして充分に展開されたパラグラフとパラグラフの間にも，広い意味での全体の主題に照らして，論理的に無理のない自然なつながりが要求されるわけであるが，この小論では，1つのパラグラフ内での問題にしぼって，考えていきたいと思う．以下，本学の学生に課した英作文を手掛りに，パラグラフの概念形成の問題点をみる事を通して，英語表現指導の一助としたい．

Ⅱ．実験課題・自由作文の分析

パラグラフの概念の把握は，英語表現の基本であるばかりでなく，広く読解にも役立つ事はすでにみてきたが，1つ1つの英文の意味をとるのに四苦八苦している学生にとっては，パラグラフの事迄考える余裕がないというのが実情であろう．しかし和文英訳ではなく，自ら英語でまとまったものを書こうとすると，パラグラフの概念形成は避けて通る事のできない問題である．そこで本学 62 年度2年次生で，英語表現ⅡC に登録された学生 22 名を対象に，実験課題を課し，パラグラフ概念形成過程の問題点を探る事にした．このクラスに登録された学生は，入学直後の placement test に於いて上位 1/3 以内の成績をとった学生で，ある程度の英語の基礎力はすでに身につけていると思われる為，パラグラフの概念形成が可能であろうとの見通しのもとに，対象として選んだ．

まず最初の授業の時に，パラグラフについて一通り説明し，Myself という題で自由作文を書かせた．初めに説明を聞いてから書く作業に入ったので，一文ずつ行を改めて書くといった，形の上ではパラグラフの形をなしてないものは皆無であった．この課題の目的は，個々の学生の書く力の現状を知る事にあった．書くという事は読解にくらべて，より積極的な作業である為，学生の英語力に関しても，問題点がより鮮やかに浮き彫りにされる．文法事項にしても，知識として知っているだけでは不充分であって，使いこなせる様になっていなければ意味がないに等しい．ある程度英語力のある学生に，文法問題としてテストをすると殆ど間違えないのに，実地に英文を書かせると，三人称，単数の現在形には s 又は es をつけるといった中学の始めに習う様なごく基礎的な事すらも，きちんと身についていない学生が，本学のみならず目につく．このギャップを埋める為，いいかえれば単なる知識ではなく，実際に英文を使いこなせる様にする為には，パラグラフの概念形成が深く係っているのではないかとの仮定のもとに，学年当初に課した自由作文の添削結果を分析していきたい．

この課題は，自由作文の形で学生に自由に書かせたので，全員が1つのパラグラフではなく，幾つかのパラグラフをたてて書いていた．添削をしてまず気付く事は，1つのパラグラフを充分に展開しきらない内に，という事は

support sentence が不充分なまま，次のパラグラフに移ってしまっている事である．今回の課題は自己紹介であった為，殆どの学生は，My name is ... という書き出しで，最初のパラグラフを始めている．次いで年齢，住んでいる都市の名前といった構成が，大方の学生の最初のパラグラフの内容である．

具体例として，ある学生の次の作文をみてみたい．

My name is .... I'm nineteen years old. I live in Tatebayashi city.

There are five in my family[1], father, mother, two brother[2] and I.

My hobby is playing the piano. But I can't play well. Other hobby[3] is reading. My favorite writer is Kuniko Mukôda.

（実例1）

この作文は，書いた学生の許可を得て，名前の部分を除き，全文そのままの形で転記したものであるが，3つのパラグラフで構成されている．第1のパラグラフは，名前，年齢，住んでいる所についての記述であり，第2のパラグラフは家族について，第3のパラグラフは趣味についてという形でまとめられている．それぞれのパラグラフは，新しいパラグラフの始めごとにきちんと引っ込めて書かれており，形の上では整っている．語法上の誤りもそう多くはない．まず2番目のパラグラフの family の後の comma[1] は，家族の成員を次に具体的に列挙するわけであるから，colon に換える必要がある．又 brother[2] の前には two があるので，s をつけて brothers と複数形にしなければならない．更に第3のパラグラフの Other hobby[3] は，もし趣味がピアノと読書の2つだけで他にないのであれば，my を加えて My other hobby とすべきであるし，他にもまだ幾つか趣味がある場合には，Another hobby of mine とすべき所であるが，それ以外には特に語法上の問題はない．しかしパラグラフの展開という観点からみたら，どうであろうか．第1のパラグラフにしても，名前，年齢，住んでいる所と一応の情報は提供されているものの，紋切り型の細切れの情報でしかない所に問題がある．年齢にしても，学生の中には上記の例の様な記述に続けて，誕生日を付記した者もいるが，更にそれと関連づけて，名前の意味，由来といった展開が可能であろうし，又住んでいる所を中心としたパラグラフをたてて，我が家の立地条件やその町についての描写や説明によって展開する事もできよう．要するに，上にあげた例では，文と文との間に必然的なつながりや流れが感じられないままに，パラグラフが終ってしまっている．第2のパラグラフにしても，家族の成員を唯列挙しているだけで終ってしまい，それぞれの構成員についての展開に欠ける．これではわざわざ別のパラグラフをたてた意味が薄れてしまう．趣味を取り扱った第3のパラグラフも含めて，残念ながら総じて展開が不充分なまま終ってしまっているといわざるを得ない．

次に引用するのは，2つのパラグラフに分ける必要がないのに，新しいパラグラフをたててしまった例である．

My name is .... My family live in Aomori, so[1] I ilve in Saitama alone.

I thought that to live alone is to live my life the way I want[2]. But it didn't so[3]. There is[4] a lot of things to study in society. I must do things around me for myself. For the first time it[5] was very difficult for me. But by those things, I could grow.

（実例2）

この例文の，このままでは展開が不充分な第1のパラグラフも，第2のパラグラフを追い込んで1つのパラグラフにまとめる事により，展開のあるパラグラフとする事ができる．その際，最初のパラグラフの2番目の文に使われている so[1] は，ここでは接続詞として使われているので，文法的には間違った使い方ではないが，but か while に替える事によって，青森に住む家族と埼玉に1人住む私（I）との対比が明

確になり，第2のパラグラフを追い込んで1つのパラグラフにまとめるのに，自然な流れを産み出す効果がある．構文的には軽んじられ易いつなぎの言葉，ここでは接続詞の，パラグラフの構成に於いて果たす役割が如何に大きいかがこの例からもわかる．その他表現上の問題としては，live my life the way I want[2] に於ける the way の口語表現は認めるにしても，want の後に少なくとも to がほしいし，次に続く But it didn't so[3]. は，文構成上成り立たないので，But it didn't go that way. とする．続く There is[4] a lot of things ... に使われている be 動詞は，複数形の a lot of things. に呼応するわけであるから，当然 is[4] を are にしなければならないし，For the first time it[5] was very difficult for me. の it[5] は何をさしているのか明確でない為，文意がはっきりしない．代名詞が何を受けているのか頭の中で明確にして使わないと，往々にして文が意味をなさなくなってしまう．先の be 動詞の問題にしても，副詞の there が文頭に来ている為，主語と動詞の位置が逆転している事で見落としたのであろうが，動詞が主語として何を受けているのか，見極めて使う必要がある．日本語の場合は，主語を省略する事が多いので，関係をしっかりおさえる事なしに，何となく感覚的につなげてしまう場合がある．しかし英語で書く場合には，関係をしっかり把握する事が，特に必要である．

上記の一見個々の語法上の誤りにみえるものも，煎じ詰めれば，関係の把握の不足に起因するとみる事ができる．この事は，学生の英作文を添削していてよく遭遇するのが，関係代名詞，関係副詞といった所謂関係詞，それに態の問題である事からも伺える．これ等は，皆，関係をおさえる事に不慣れな為におこる誤りといえる．一例をあげると，ある学生は My birthday is June, 28 1967, when I will be twenty. と書いている．June の後におかれた comma をとって June 28 とつなげ，その後，つまり日付と年の間に comma をもってくる必要がある事はいうまでもないが，もっと大きな誤りは，この文で when が何を受けているかという事，いいかえれば関係をおさえていない事にある．つまりこの文では関係副詞の継続用法を使っているのだが，このままでは when は June 28, 1967 を受けるわけで，生れた年に 20 歳になるというおこり得ない事が書かれているわけである．又，別の学生は I have a part time job. It is given enjoyment and new friends instead of tiredness. と書いている．この第2の文で，「アルバイトをしても疲れない」というのであれば instead of を使ってかまわないが，文脈からして，「疲れるけれど，反面アルバイトをする事によって喜びを感じたり，新しい友人もできる．」という意味であろうから，instead of はここでは使えない．しかし更に問題なのは，It と enjoyment 及び new friends との関係である．It が a part time job をさしている事は明白であり，a part time job と enjoyment 及び new friends との関係を考えると，アルバイト（a part time job）が enjoyment と new friends を与えるのであって，It が主語であれば，受動態ではなく能動態を使わないとおかしい．逆に enjoyment 及び new friends が与えられるのは，アルバイトではなくて書き手である私（I）であるので，受動態を使うのであれば，I が主語でなければならない．即ち，関係をきちんとおさえないまま，形の上で丸暗記した文法知識を使おうとしても，意味の通った正しい英文はできない．逆に関係がはっきりおさえられていれば，文法知識も生きてくるわけで，慣用上の小さな誤りはあっても，文脈を左右する様な大きな間違いは避けられるのではないかと思われる．

ところで，会話の場合は，唯単語を並べただけでも，ある程度話は通じる．しかし書かれた言葉となると，そうはいかない．ここに推敲による構成を含めた論理的な詰めが改めて必要となるのだが，構成を考えるには，関係をおさえる事が前提となる．次の例は，ある学生による

家族について書かれたパラグラフである．

I have Five Families[1]. My Father[2] and mother and my younger sister and grandfather[3].

They are interesting[4].

HoLidy[5] sometimes I went[6] to eating Dinner[7] with my family. My father is bussiness man[8] and my mother is house work[9] and my younger sister is high school student[10].　（実例3）

会話には割に慣れている事が伺われる文章で，パラグラフとして内容的にはある程度の展開もある．しかし書く場合に必要な推敲の跡が伺われず，形の上でも grandfather[4] と interesting[5] の後に，それぞれ意味のない余白を残している．文体は所謂ブロークンに近く，会話の場合は何とか通じても，書かれたものとしては理論的な詰めが足りず，矛盾だらけで，これでは意味が正しく伝わらない．まず I have Five Families[1] であるが，Five も Families も大文字にする必要はないし，この表現では5人家族ではなくて，家族が5つある，つまり5家族という意味になってしまう．次に続く文は，家族の成員を列挙してあるだけで，動詞もないのに，文の如く大文字で始めて period 迄うってある．更に細かくみると，Father[2] を大文字で使うのであれば my はいらないが，書き言葉であるので，ここではむしろ father を小文字にして my father とした方がいいし，列挙の順序にも注意を払うべきである．まず最年長者である grandfather を最初にもっていって，最後に自分も加えて5人全員列挙し，colon を使って最初の文とつなげれば，We have five in our family : a grandfather, my father and mother, a sister and myself. の様にまとめられよう．妹については，後に高校生との説明がある事だし，英語では上下関係は余り問題にしないので，younger は省いてかまわない．They are interesting[4]．はこの文からの展開がないのにここに挿入すると，文と文とのつながりをぎくしゃくとしたものにしてしまう．次の文もこの位置におくと，流れを悪くしてしまう．むしろ，家族の成員を列挙した後に続けてすぐ，個々の構成員の説明である my father is... 以下をつなげ，最後に「休日には家族そろって外で食事をする.」という文をもっていった方が，思考の流れが自然であろう．つまり，同じ内容を述べるにしても，記述の順序によって流れが変り，読者の受ける印象が違ってくる．1つ1つの文に戻ってみてみると，HoLiday[5] は，この文では副詞的に使われているのであるから前置詞を必要とするし，そもそも何の為に語中のLを大文字にしたのか理解に苦しむ．不用意な大文字の使用は Dinner[7] にもみられる．時制に関しても，went を使うと，過去の1つの出来事にすぎなくなってしまうので，現在形を使って On holidays we sometimes dine out together. とでもすると，簡潔に表現できよう．又個々の成員についての記述をみてみると，最後に述べられている妹に関しては，highschool[10] を2語にして冠詞を補い，a high school student とすれば問題はない．父親に関する記述では，職業が会社を経営している実業家ならば，a businessman と綴字を直し，一語にすれば，この単語を使ってもかまわない．しかし会社員の意味で使ったのであれば，an office worker と表現すべきで，日本語の中で使われている外来語をそのまま英文に持ち込むと，思わぬ誤解を生む事になる．次に母親の記述についてであるが，my mother is house work では，「母親＝家事」という等式になってしまう．主婦であるという意味を伝える為には，be 動詞の代りに do 動詞を使って my mother does housework とするか，あるいは be 動詞を生かすならば，my mother is a housewife という表現に直す必要がある．勿論もっと簡潔に my mother keeps house とも表現できる．

上の例からもわかる様に，be 動詞を使う場合，特に補語が名詞形の時は，主語と補語とを等号でつなげる事ができるかどうか，即ち主語

と補語との関係を確かめる必要がある．基本動詞である be 動詞の使い方を誤る学生は多く，「私は陽気な性格である.」という意味で書いたと思われる I am a very cheerful disposition. もこのままでは，I = a very cheerful disposition という事になってしまう．「である」という日本語から連想して，そのまま be 動詞を使ったのであろうが，主語との関係を考えれば，「陽気な性格を持っている.」という表現にすべきだという事に気付くわけで，be 動詞の後に of を補うか，又は be 動詞を have 動詞に替える必要がある．日本語で考えてそれを英語に直す，いいかえれば和文英訳の過程をとる場合には，一度英語的構文の日本文におきかえた上で英訳した方がいいといわれるのは，理由がないわけではない．和文英訳に際して，日本語的感覚でそのまま逐語訳すると，意味の通じない英文になってしまう事がよくあるからである．

ところで，文と文との間に自然な流れを感じさせる為には，順序への配慮を含めて，内容そのものが論理的につながっていなければならない事はいう迄もない．しかし補助的とはいえ，適切なつなぎの言葉の果たす役割も大きい．一見簡単そうな接続詞の使い方を１つ誤る事によって，パラグラフに矛盾を生じ，文意が正しく伝わらなくなってしまう事すらある．この意味で，関係を論理的にきちんと表す為には，つなぎの言葉の選択はおろそかにはできない．例えば，先に引用した実例２の場合の接続詞 so も，あの場合は文法的には間違った使い方ではないが，別の学生の作文にみられる次の例では，文法的にも正しい使い方ではない．So I like music, my hobby is playing the guitar ....．この文をこの学生は，これだけで構成された１つの独立したパラグラフとして書いているのだが，この位置では so は comma で区切られたそれぞれ独立した文 I like music と my hobby is ... をつなげる事はできない．comma でつなげる為には，so を接続詞として comma の後，即ち my hobby で始まる文の前にもってこなくてはならない．つまり so の単語としての意味を漠然と知ってはいるものの，使い方を熟知していない為に生じた誤りである．もっとも理由づけの結果としての so は，書き言葉では and so の形をとる事が望ましいとされているし，この文脈では，厳密な意味での理由づけではないので，むしろ and だけでつなげた方がすっきりする．つまるところ，関係をしっかり見極めないと，適切な接続詞の使い方はできないという事であろう．

接続詞に関して，更に別の学生の書いたものの中から，幾つかの例をみてみたい．

I like travel to go to[1] Karuizawa. But[2] it[3] takes much money, I can[4] go to Karuizawa only summer[5].

There is a grandfather's villa[6]. It was built in 1973. I go to that place with my family or my friends every year[7].

（実例４）

第１パラグラフ，２番目の文の文頭の But[2] は，最初の文と第２の文をつなげる働きはするが，it takes much money と I can go to Karuizawa ... とをつなげる接続詞とはなり得ない．接続詞 but を文頭に使ったので，comma で区切られた２つの文がつながっていると錯覚したのであろうが，この２つの文をつなげる為には，もう１つ別の接続詞が必要である．尚，始めの文の travel to go to[1] ... の様に，travel と go to を一緒に使うと意味が重複してしまうし，軽井沢にある祖父の別荘について書かれた第２のパラグラフを含め，この作文全体の文脈からして，ここではむしろ単に I like Karuizawa. として，次の文につなげた方がいい．この場合，２番目の文の it[3] が受けるものがはっきりしなくなるので，comma の前に it の意味上の主語として to go to Karuizawa を補い，後半は同じ語の繰り返しを避ける為，to Karuizawa の代りに there を使い，別の接続詞 as を補って２つの文をつなげる．更に副詞句にする為に summer[5] の前に in を補い，助動詞 can[4] を削

除すれば，一応文意は伝わろう．しかし全体の構成からいえば，第1のパラグラフの2番目の文章を削除し，第2のパラクラフの最初の文のvilla[6]の後にin Karuizawaを補う．更に最後の文のevery year[7]をevery summerに替えて第1のパラグラフに追い込み，1つのパラグラフにまとめれば，尚展開のあるパラグラフとする事ができよう．

次に，接続詞の使い方として，文法上は問題ないが，実際には必ずしも逆節の関係にないにもかかわらず，日本語にすると「が」でつながれる為，英語では純粋に逆節にしか使わないbutを使ってしまって，つながりが不自然になってしまった例をみてみたい．

I want to go abroad in many countries[1]. And I want to be able to speak English, French, Chinese, Spanish, German, and etc[2] in the future. But[3] It[4] is my dream[5].

（実例5）

この例では，最後の文の文頭のBut[3]は削除して，原文ではたまたま間違って大文字が使われていたのを，文頭にもってくる事によってそのまま大文字を使い，It[4]で始まる文にすると，ずっとすっきりする．一方，もし更に続けて，現在はまだ話せないという現状との対比の形でパラグラフを展開させるのであれば，my dream[4]の前にonlyを補う事によって，Butがこのままの形で生きてくるだけでなく，次に続く対比を導く重要なつなぎの言葉の役割を果たす事になる．しかしこの文章を書いた学生は，これだけでこのパラグラフを終えているので，単に夢を語っているだけのパラグラフとなり，逆節のbutを使う必要性がないばかりでなく，かえって使う事によって流れを悪くしてしまっている．この他にも勿論，最初の文のin many countries[1]は，既出の動詞にはつながらないので動詞をたて直し，and visit many countriesとすべきであるし，etc[2]はet ceteraの略号であるので省略記号のperiodが必要である上に，etc.はand so on又はand so forthとおきかえられるわけで，etc.を使うのであれば，andを削除しなければならない事はいうまでもない．

同じ様に，文法上の問題はないが，つながりという点で一考を要する例として，My hobby is swimiming. Because I like sports.をみてみたい．swimimingの綴字を直さねばならないのはいう迄もないが，このままでは文と文とのつながりがすっきりしない．2つの文が厳密な意味では理由づけでつながる関係にない為であろう．水泳がスポーツの一種である事を考えれば，2番目の文のbecauseをとって順序を逆にし，I like sports and my hobby is swimmingとする方が自然な流れが出よう．

適切な語句の選択が求められるのは，何もつなぎの言葉に限った事ではない．I began to play it[1] five years ago. And now I join[2] a tennis club.をみてみたい．最初の文のit[1]は前の文のtennisを受けているのだが，2番目の文は動詞join[2]をbelong toに替える必要がある．文脈からして「現在テニスクラブに所属している.」という状態をいっているのであって，「テニスクラブに加入する.」又は「テニスクラブの会員になる.」という動作をいっているのではない事は明らかであるから，ここでは動作を表す動詞joinではなく，状態を表す動詞belong toを使う．日本語では「テニスクラブに入っています.」で状態を表し，「テニスクラブに入ります.」で動作を表す事もできるわけで，この両者は日本語の場合，かなり表現が似通っている．こういった影響もある為であろうか，動作と状態の動詞を混同して使っている学生をよく見かけるが，特に書き言葉の場合，語句を漠然と感覚的に選ぶのではなく，もっと理詰めに，論理的な矛盾・重複の回避を念頭に入れ，関係・構成をふまえて厳密に選ぶ必要性を痛感する．

以上，学年当初に課した自己紹介の自由作文を，パラグラフという観点を中心にみてきたが，英語表現指導上，注意すべき幾つかの問題点が浮き彫りにされたと思う．まず文章単位で

日本語で考えて，それを英訳するというやり方では，つまり和文英訳という過程を経ると，どうしても日本語的発想をそのまま逐語訳的に英語に訳すという作業になってしまうし，思いつくままに，言いたい事を羅列するといった傾向も出易い．しかしパラグラフ単位で英文を書く時には，まずそのパラグラフで言いたい事は何か，即ちそのパラグラフで伝えたいと思う主題を１つにしぼり，それをどの様に展開させるかという構成を考えねばならない．つまり文と文とのつながりを考えて，パラグラフの主題に照らして組み立てる事になる．又常に関係を念頭において書くという事は，内容を論理的に扱う事になり，より厳密な言葉の選択を迫られる事にもなる．パラグラフを通して考える時，はじめて英語が断片的な知識や口先だけの言葉ではなく，思考としての言語になり得るのではないだろうか．そしてパラグラフの構成にみられる英語的な思考方法に触れる事を通して，日本語的な思考方法との違いを認識する事が，英語表現のみならず，真の意味でのコミュニケーションの第１歩となる様に思われる．

Ⅲ．指導上の問題点

英語的な論のすすめ方，発想に親しむ為には，パラグラフという英文の基本概念を身につける事が前提となる事をみてきた．では具体的に，どのようにしたらパラグラフの概念を身につける事ができる様になるかという問題に，少し触れたい．勿論この小論で全面的な答が得られる様な問題ではないが，学年当初に課した自由作文の分析を通して明らかになった問題点を軸に，Jupp と Milne による *Guided Paragraph Writing* を参考に，本学の学生に適したパラグラフ概念形成の為の１つの試みとして，次の様な課題を課した．具体的には，まず，先の自由作文で大部分の学生がとりあげていたが，展開不足のまま終えていた家族を主題に扱ったものをモデルパラグラフ（model paragraph）として選び，自然の速度で読みあげる．次にそのモデルパラグラフの要点のみ箇条書きにして日本語で板書した上で，再生（reproduction）の形で書いて提出させる．その後で原文のモデルパラグラフをみせてチェックさせてから，応用として，自分の家族について１つのパラグラフにまとめて書かせる．以上一連の作業である．尚使用したモデルパラグラフは末尾に付してあるので，参照されたい．

モデルパラグラフは家族構成を主題に，８人家族の成員を列挙した後，それぞれの構成員について細かい記述をする方法で展開させた典型的なパラグラフである．日本語での要点の板書に於いては，モデルパラグラフに示された順序を追って提示しており，各構成員の記述に関する基本的なパラグラフ内の配列に対しても，視覚的なヒントが与えられている．という事は，板書に示された要点を忠実に順を追って肉付けすれば，構成に問題のないパラグラフが自然にできあがる様配慮したという事である．又，モデルパラグラフを和訳したものを提示せず，モデルパラグラフの原文を聞く事を通して聴覚的なヒントの助けをかり，要点のみから英文を再構成する事で，日本語的発想の弊害をできるだけ避け，逐語訳にならない様配慮した．耳を通してのモデルパラグラフの提示を含んでいるので，聴覚記憶力（Auditory Memory Span）の問題も関与してくるが，モデルパラグラフの中の主要な表現については，意味を変えずに別の表現で書き換える練習（paraphrase）をした後に，この課題を実施したので，聴いただけでは記憶に残らなかったものも，日本語での要点の板書から，たとえ表現は原文とは違っても，内容的に同じ意味の表現におきかえて書く事は可能なはずであった．更に，この様にして再生されたパラグラフを，原文と比較対照する事を通して分析し，自らの問題点を確認した後，この配列構成を自分の家族にあてはめて書いてみる事を求めた．学年始めの自由作文で殆どの学生がすでに手掛けたテーマでもあり，聴覚的，視覚的ヒントから，１つ１つの文の構成にそれ程時間を

とられる事なく，パラグラフの観点から全体を見通す事ができるのではないかと考えた．

再生課題（reproduction）の結果をみてみると，There are eight in my family. My families[1] are grandmother and my parents and three brothers and a sister and myself. の中の families[1] にみられる様に，まだ family の使い方を熟知していない者が認められる．My family members のつもりで書いたのであろうが，family を複数形にしてこの意味を表す事はできないし，羅列の時の and の使い方も繁雑である．ここでは2つの文にして書かれているが，モデルパラグラフの原文の様に，comma にして including を使ってつなげるか，あるいは colon を使って列挙する事により，1つの文にまとめると，すっきりしよう．次に「私」が5人兄弟の真ん中という事に関する文であるが，in order of age を in other age とか in older age の様に，意味を考えずに耳からのヒントにのみ頼って書かれたものがあった．耳から入ったモデルパラグラフの原文の表現にのみ固執せず，文脈から考えて，言い換えの練習問題（paraphrase）の成果を，この様な場合にこそ活用してほしいところであった．

祖母に関する記述では，neighborhood[3] と neighbors の混同が目立った．具体例をあげると，Grand mother, who[1] is 82 years old, but she is still strong and she is depended from[2] neighborhood[3]. 等も，日本語では，「近所で頼りにされている」とか「近所から頼りにされている」という表現を使うので，前置詞 from[2] も含めてそのまま逐語訳にしたのであろうが，モデルパラグラフの原文を参照する事によって，自分の書いたものと比較し，実際にどの様に使われているか両者の用法の相違をしっかり把握する事を通して，漠然とした知識を実際に使いこなせる確実なものにしていってほしいし，又それが可能であると考える．読解に際しては，おぼろげな知識でも推測で何となくわかってしまう場合でも，書くというより積極的な作業に於いては，正しい用法を身につけていないと表現できない事は，しばしば経験するところである．文法に関しても又然りで，実際に自分で書いた時に使ってみてはじめて，用法を納得するのだと思う．先の例にみられる関係代名詞の使い方にしても，関係代名詞 who[1] で修飾された主語は，Grandmother と1語にしなければならないのはいう迄もないが，受ける述部がないまま，接続詞 but の後に新たに又，主語 she をたててしまっている．who で始まる修飾句が挿入された為に，主語と述部の関係がみえなくなってしまったものと思われる．この場合も，実際に自分で書いた上で，モデルパラグラフの原文と比較参照すれば，どこが問題なのか，はっきり自覚できると思う．自ら正しく使える様になってこそ初めて文法の知識も生かされたといえよう．どの様に表現すべきかという問題に実際に直面して，関係を考えた時に開かれた文法への関心は，必ずや生きた知識となるのではないだろうか．考えをまとめて書くという事は，その意味で問題意識を生む事になると同時に，語彙にしても，文法にしても，知識をより確実なものにする上で，重要な役割を果たしているといえよう．

次に父に関する記述をみると，教育者（an educator）と教育者の範疇に含まれる中学校長（the principal of a junior high school）とを，並列を表す接続詞 and で結んでいる学生が多い．この誤りを含む例をあげると，She is healthy, and my father is educationer[1] and junior high school pregident[2]. と書いた学生があった．この文の冒頭の She は，前の文 My grandmother is eighty-two years old. の my grandmother is eighty-two years old の my grandmother を受けて祖母をさしているのだが，文法的には間違いではないものの，内容的には最初の文[1] を前の文につなげて1つにまとめ，この文は My father から始める事により，それぞれの家族の成員に関する記述を，より明確な形で構成する事ができる．語句に関しては，接尾

語 er をつけると人を表す事が多いので使ったのであろうが，educationer[1] は造語であって，教師の意味では an educator を使う．又 pregident[2] は president のつもりで書いていると思われるが，大学の学長や総長には使っても，中学校長の場合は president ではなく，principal である．これ等の事をふまえて，もう1度モデルパラグラフの原文をみてみると，My father と an educator を同格において主語にし，「公立中学の校長である．」という述部につなげた原文の構文が，より明確に理解されよう．

かつては教師をしていた事もあるが，現在は主婦である母に関する記述では，まず次の例をみてみたい．My mother who is housewife was educator too. この場合の関係代名詞の使い方であるが，my mother は1人しかいないわけで決っているので，更に限定するのはおかしい．それ故限定用法ではなく，who から housewife 迄を comma で囲み，付加的説明の形にする．又 housewife と educator にはそれぞれ不定冠詞が必要である事はいう迄もないが，このパラグラフは家族の成員それぞれの現状について書いているので，母に関しても，who で導かれる修飾句に過去の事を入れ，現在の状況を主文にもっていった方が統一がとれる．この場合，過去と現在とをはっきり対比させる為に，once, now の副詞をそれぞれ補うと，尚効果的である．モデルパラグラフの原文では，教師と主婦とにそれぞれ副詞を補う事により同格に使って主語にかけ，「家族の世話をしている．」という主文の述部につなげているが，大部分の学生は，板書に提示された要点を肉付けする事なく，そのまま英文にする事に終始し，先にあげた例文の様な内容にとどまった記述をしていた．

兄弟に関しては，まず長兄であるが，「会社に勤めている」という表現に問題があった．My oldest brother is working[1] a company[2] in Sendai. は素直な表現で，文法的には company[2] の前に不定冠詞の at を補えば，形の上での問題はないが，現在進行形 is working[1] を現在形の works におきかえないと，書き手のいわんとするところは表現できない．「勤めている」「働いている」という日本語の表現にひきずられて，進行形を使ったのであろうが，英語ではこういう場合現在形を使う事は，進行形の意味を考えれば明らかであろう．勿論この場合の前置詞 at は，for におきかえる事もできる．動詞を使わず，会社員という名詞形で書いた学生も多いが，businessman は，学年当初の自由作文のところですでに述べた様に，管理責任をもたない一般の会社員の場合には使えないし，salalyed man は salary man とそのまま和製英語にしなかったのは立派だが，残念ながら綴字が間違っている．a salaried man, 又は a salaried worker とすれば，一応は正しい使い方になるが，より具体的に an office worker とか a white-collar worker とする方が尚望ましい．英語では，より具体的な表現が要求される事を知る必要がある．その意味では，モデルパラグラフの原文でもそうなっているが，先の work という動詞を使った書き方は望ましい表現で，こういった場合の表現としてよく使われる．

京都の大学の4年生である次兄，中学3年の妹，小学校5年の弟については，学年を表す表現に間違いが目立った．大学の4年という場合は，モデルパラグラフの原文にある a senior at a university を使えば，すっきり表現できるのだが，senior college student とか a student of fourth grade in the university 等と表現している学生がかなりいる．senior college は junior college（短大）と区別する為の4年制大学の意味，又は4年制大学の後半2年の意味に使われるので，a senior college student は必ずしも大学の4年生ではなく，唯単に4年制大学の学生，又は大学の3年生か4年生という意味になってしまい，具体性に欠けてしまう．一方，a student of fourth grade in the university の場合であるが，小学校の事を grade school という

様に，grade はもともと小学校の学年をさす言葉で，現在では high school 迄通して grade で表現する様になってはいるが，大学生の場合には使わない．又 the other elder brother is a student of university in Kyoto and he is senior. は university 及び senior の前に不定冠詞 a を補えば，文法的には問題ないが，概念が重複してしまうので，モデルパラグラフの原文の様に，1つにまとめた方がいい．妹に関しても，中学3年という日本語の表現から，third grade in junior high school と書いた学生がいるが，grade を使うのであれば，小学校から通して数えた数を使うべきで，be in the ninth grade 又は be a ninth grader としなければならない．grade と grader の用法の混同は，小学校5年生の弟についての記述にも多く，My youngest brother is 5th grade. と書いている者がいるかと思えば，逆に is in fifth grader と書いている者もいる．又 My brother is a fifth grade student in primary school. と書いた学生がいるが，student はもともと大学や専門学校の学生に使う言葉で，アメリカ等で中学生に使う事はあっても，小学生には使わない．単語としては易しい言葉であっても，文化を背景に実際にどう使われているかを知った上で，文脈にあった正しい用法を身につける事は，そう簡単ではない事が，これ等の例からもわかる．実際にまとまったものを書いてみなければ，間違いもおかさずにすむであろうし，何となくわかった様なつもりにもなってしまう．間違いを恐れずに書いてみて，間違いから学んでこそ，用法を確実に身につける事ができるのでないだろうか．

Ⅳ．ま　と　め

最後に上記一連の過程をふんだ上での2度目の自由作文をみてみたい．中には，家族の個々の成員に関する記述をそれぞれ別だてにしてしまい，相変らず最初のパラグラフを肉付け不足のまま終えてしまっている者もいて，具体的な記述の裏付けを必要とする英語的展開の必要性の理解に欠けている者が，少数とはいえ，この段階でもいる事を認めざるを得ない．とはいえ，大部分の学生にあっては，パラグラフの主題にそっての展開という点では，進歩がみられた．しかし，やはりまだ関係を考えた上での論理的な詰めが足りないし，語句の意味を厳密におさえる事なしに使ってしまっている者がかなり目につく．特に自由作文の場合，最初に日本語で考えてから英訳したと思われるものが，かなりある．My father is works at a company. も，日本語の「働いている」を逐語訳した事から生じた誤りである可能性が強い．be 動詞の様な基本的な動詞に，かえって誤用が多い事は，学年当初の自由作文の分析の中でも触れたが，一見易しそうにみえる動詞の方が，使い方が多岐にわたる為，実際にはむしろ難しい事に気付かず，知っていると思いこんで，誤った使い方をしてしまう者が多い事を，2度目の自由作文課題の結果も示唆している．基本的な動詞の使い方を，所謂文法知識としてではなく，実際に自分の伝えたい事を書く事を通して覚えていく事の必要性を痛感させられる．この事は動詞のみならず，他の品詞も含めて語彙一般に関してもいえる事で，英語の場合，1つの単語に1つの意味しかないわけではないので，単語集等で語彙を覚えるやり方では，その単語に関して固定観念をもち易く，使い方によっては全く違った意味になる事に気付きにくい．文中で，時によると更にパラグラフの中で使われて初めて，その単語のそこでの本当の意味がわかる場合がある事は，読解の折にもよく経験する事である．1つの単語の意味も，その単語独自の意味として捉えるのではなく，その単語と他の単語とのつながり方，関係によって捉える事が必要である．つまり使い方の中で意味を考えていかねばならないわけで，よく知っている筈の語句の誤用は，この視点に欠けている為に生じたものとみる事ができよう．知っているつもりの単語も，いざ実際に使おうとすると正しく使え

ないのでは，宝の持ち腐れに等しい．正しい用法を覚えるには，文単位では不充分な場合がある事が，今回の課題からも明らかであり，思考単位であるパラグラフの中で実際に使ってみる事が望ましい．その時は間違っても，実際に文脈の中で考えて使ってみて，何故そこでは不適切なのかを自覚できれば，たとい時間はかかっても，単なる知識ではなく，身についた使える知識としていく事ができるのではないかと期待している．その意味で，指導に際して唯書かせるだけではなく，返却の折，１人１人に面接の時間をとって，誤りについて説明する事は意義があると思われる．

パラグラフ単位で書いてみないと，習得でき難いもう１つのものが，視点の統一である．２度目の自由作文にみられる次の例は，両親に関する記述に続く兄についての記述であるが，父に関しての記述に於いて「父は工場を経営している」という文があり，それをふまえて書かれたのが，次の文，My elder brother is twenty-three years old, he helped my[1] father's factory. である．ここで使われている父にかかる代名詞の所有格は my[1] であるが，父は著者である「私」にとって父であるだけでなく，この文の主語 he 即ち兄にとっても父である．my を使うと，文の中で兄から「私」へと視点が動いてしまって一貫性に欠けるので，兄も「私」も含む our に替え，今も手伝っているわけであるから helped も現在形にし，接続詞を補って２つの文をつなげる．又日本語では「父の工場を手伝っている」という表現を使うが，英語の場合は動詞と目的語の関係をもっと厳密に考えて，comma の後の後半の部分を and he helpes our father at his factory. の様に替えると，次に続く同じく兄を主語とする趣味に関する文へのつながりが，より滑らかになる．この例からもわかる様に，所有格の使用１つとっても，適切に使う為にはパラグラフ単位で考える事が望ましく，実際にパラグラフ単位で書いてみる事の効用は大きいといえよう．更に，パラグラフの展開方法にみられる英語的な論のすすめ方，思考方法に親しむ事は，言語を通して英語圏の文化を知る事にもつながるものと考える．

注

(1) Richard H. Dodge, *How to Read and Write in College*, John Weatherhill, Inc. 1962, p. 143.

(2) Frank Chaplen, *Paragraph Writing*, Oxford University Press, 1970, p. 1.

(3) Ibid., p. 8.

Wilkerson 等はこれを controlling sentence と呼ぶ．

(Bruce Wilkerson & Yasushi Saito, *A Short Guide to Better Paragraphs*, 南雲堂，1984，p. 5.)

(4) Chaplen, op. cit., p. 14.

(5) Wilkerson & Saito, op. cit., p. 72.

参考文献

Althaus, Mary E. and Yoshiko Furuki, *A Handbook of Correct English Expression*, 荒竹出版，1981.

Chaplen, Frank, *Paragraph Writing*, Oxford University Press, 1970.

Dodge, Richard H., *How to Read and Write in College* (A Harper International Edition), John Weatherhill, Inc., Tokyo, 1962.

Jupp, T. C. and Milne, John, *Guided Paragraph Writing*, Heinemann Educational Books, London, 1972.

Kaplan, Charles, *Guided Composition*, Holt, Rinehart and Winston, Inc., New York, 1968.

Matsumoto, Irene & Yasuhiro, *A Handbook of Common Mistakes in English Among Japanese Students and Businessmen*, 北星堂，1976.

Saito, Hiroshi and Wilkerson, Bruce M., *A First Step to Paragraph Writing*, 成美堂，1987.

Sato, Yasushi and Wilkerson, Bruce, *A Short Guide to Better Paragraphs*, 南雲堂，1984.

資料

MODEL PARAGRAPH

There are eight in my family, including a grandmother, my parents, three brothers and a sister and myself. Counting from the top down or from the bottom up, I am the third child. That is, I am right in the middle in order of age. My grandmother, (who is) eighty-two years old and still going strong, is depended upon by senior citizens in the neighborhood. My father, an educator, is the principal of a public junior high school. My mother, once also a teacher, but now a housewife, takes care of the family needs, My oldest brother wroks at a company in Sendai. My next oldest brother is a senior at a university in Kyoto. My sister, a ninth grader in junior high school, has been studying hard for the upcoming high school entrance exam. My youngest brother, a fifth grader, is very dependent on us.

from *A First Step to Paragraph Writing* p. 6.